〔日本書紀十九 欽明〕十二年三月、以麥種一千斛、賜百濟王、

〔東大寺小櫃文書上〕下綱丁重依

可下麥參佰拾五斛事　正麥三百石 車力十五石

右東大寺當年御封米貳佰斛代可下之狀如件、　但可取請文――

永承二年七月廿三日

讃岐守藤原朝臣

〔宇治拾遺物語一〕これも今はむかし、ゐ中のちごのひえの山へのぼりたりけるが、櫻のめでたくさきたりけるに、風のはげしくふきけるをみて、このちごさめ〴〵となきけるをみて、僧のやはらよりて、などかうはなかせ給ふぞ、この花のちるをおしうおぼえさせ給か、櫻ははかなき物にて、かくほどなくうつろひ候なり、されどもさのみぞさふらふとなぐさめければ、櫻のちらんはあながちにいかゞせん、くるしからず、我て、の作たる麥の花ちりて、實のいらざらんおもふがわびしきといひて、さくりあげてよゝとなきければ、うたてしやな、

〔甲子夜話四十三〕日光御詣ノ御道傍ノ畑ハ、麥作ノ畦ノナリヤウ、必ズ竪畦ニシテ横畦ナルコトナシ、横ナレバ人潛ニ麥間ニ隱レ居ラルヽユヱ、竪畦ニシテ見通シニ成ルヤウニ爲ルコトナリト、或人語レリ、何ッノ比ヨリ斯クスルコト始リシヤ、

〔うけらが花二篇長歌七〕濱田君のしりたまへる、石見國長濱のむらに、麥の八重穗といふものなり出たりとて、見せたまへるによりて、ほぎ歌よみてまゐらす、

角さはふ石見のくにの、白浪の、濱田のさとの、君がよを、長濱の村に、ゆだねまき、おほせし麥の、五月きて、ほに出る見れば、その麥の、くき一もとに、さきくさの、三穗ならび出、たまくしげ、二穗にわかれ、いやさかえ、立さかえけり、千早ぶる、神のみよゝり、天のしたあを人ぐさの、二なき、いのちつ